



TITLE:

キヤナンの富の概念に就きて(二、完)

AUTHOR(S):

石川, 興二

CITATION:

石川, 興二. キヤナンの富の概念に就きて(二、完). 経済論叢 1920, 10(3): 378-389

ISSUE DATE:

1920-03-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/127636>

RIGHT:

東京帝國大學經濟學會 經濟論叢

第十卷 第三號

大正九年三月一日發行

論說

消費税に於ける累進課税……………法學博士 神戸 正雄

社會の存續……………文學士 高田 保馬

鎌倉時代の家族制度(二)……………文學博士 三浦 周行

明治の米價調節(五)……………法學士 本庄榮治郎

所得税均等負擔の理想と實現(一)……………法學士 汐見 三郎

キヤナンの富の概念に就きて(二、完)……………法學士 石川 興二

時事問題

家賃騰貴と都市計畫……………法學博士 戸田 海市

官吏の待遇を論ず……………法學博士 小川郷太郎

國庫制度の改定に就きて……………法學士 大森 研造

雜錄

交通機關論の交通論における地位……………法學士 小島昌太郎

米國勞働者家計三十年間……………法學博士 河田 嗣郎

岡山藩の開墾策(二、完)……………黑 正 巖

キヤナンの富の概念に就きて(二、完)

石 川 興 二

第二段 キヤナンの富の概念の意義

凡そ、一個の學の根本概念に就き論争の激しきこと經濟學に於けるが如きものは殆ど稀であらう。是其概念を單に其概念自身として論ずるが故である。これ所謂概念の遊戲である。斯學の一個の概念の可否、價值はそが斯學そのものに對する意義に於て始めて批判し得べきものである、況してや斯學の主題としての、氏の富の概念の意義は、只そが斯學全體に及ばす意義に依りてのみ批判さるべきものである。

富の概念が斯學に及ばす意義は、其『富』が斯學に與ふる特徴の意義である。而して此『富』の斯學に與ふる特徴は『富』それ自身の特徴に依るのである、故に先づ此『富』自身の特徴の吟味より始めねばならぬ。

其一 氏の富の特徴

(一)氏の『富』の第一の特徴は、前述せし如く富の主觀化である。即ちそは通説の富なる貨物又は勤勞それ自身ではなく、此等のものより享受する人間の満足である。即ち外界に存する物より、人間の内界即ち心の世界へ流れ入つたものである。故に此意味に於てそは内界の富とも云ひ得る

が、然し斯學に於て内界の富又は財と云ふ時は、普通、人の技術等を意味するを以て、之と混同を避ける爲め、同じく適當な語ではないかも知れぬが、主觀的富又は富の主觀化と云ふ語を余は用ひ來つたのである。

此富の主觀化は、それを表すべき語を考へねばならぬ程に、氏の富の絶對的特徴と云ふも過言ではあるまい。例へば、世界的に代表的のものとも見るべきマーシャル教授の原論、又我國にて最新の代表的原論たる福田、山崎兩博士の著に見るも、斯學の主題として、氏の如き、主觀的の富の概念は見られないのである。假令『富』を押進めて所謂無形財をまで含ませても、之をキャンナン氏より見れば、此等無形の財は有形の財と共に、單に外界にある富の手段に過ぎぬものである。吾人は區別を充分に明かにすることが大切である。

(二)經濟的富の標準としての交換の可能性の排除、是第二の特徵である。氏が上述の『富』の手段たるもの、中へ勤勞をも含ましむることは、氏の富の特徵とも云ひ得るが、然し、此點は排斥する學者も多いが亦之を容れる學者も少くない。只氏に於て特に特徵と考へらるゝは、之を單に富の手段として含ましむることである。然し此よりも特に注意すべき氏獨特の點は、經濟的富と然らざるものとの區別標準として、殆ど定説となつてゐる交換の可能性と云ふ表徴を明白に排除せしことである。¹⁾例へば福田博士の著には、氏と全然反對に、貨幣價值を有すると云ふことを以て、經濟的富は勿論、總ての經濟學の根本概念の根本的特徴としてある。²⁾マーシャル氏も經濟的富の第二の特徵を directly capable of a money measure ³⁾としてゐる。山崎博士の著の如く此點に

1) Cannan; Wealth, p. 14.

2) 同博士國民經濟講話、乾、三二頁、經濟學講義中卷二八一頁、同三二五—三二六頁參照、

3) Marshall; Principles of Economics

全く言及してないものもあるが、之を否定する學者に至つては甚だ稀れである。而も氏は之を排除するに多くの理由を以てしてゐる、其中最有力なるものを舉れば、交換の可能性と云ふことを經濟的富即ち斯學の主題たる富の要件とすることは、此富の概念の存立を、私有財産制度の存在及交換の實行に關はらしむるものであり、従て『富』の學たる經濟學の運命を、同じく私有財産制度の存續に關はらしむるが故に不可である云ふのである。⁴⁾

而して氏が、氏の富たる満足に就き、新たに定めし經濟的富の標準は、前段に於て述べし氏の富の概念より明かなるが如く、⁵⁾貨物及勤勞より來りし満足が經濟的満足即ち經濟的富であり、之等のもの以外より來りし満足は非經濟的のものであると云ふにある。而して氏は此標準の充分なるものなることを次の如くにして論證してゐる。即ち此二者の別は、恰も青と緑との色の別の如くに、何人にも一目瞭然たるものであるから、吾人は、一方、『飢餓の満足』と云ふ如き最明かなる經濟的満足と、他方、『神への誓を拒みて餓死する殉教者の満足』と云ふが如き最非經濟的の満足とを、兩端に置いて此間に總ての満足を順次に經濟的のものより非經濟的のものへの係列に配列することが出来る。而も兩者の別は程度の差であつて、恰も綠色が次第に青色へ移行行くが如きものであるから、經濟的富の限界は決定的には事實上不明瞭である。然し乍ら、此不明瞭にも拘らず我々は、貨物又は勤勞より來る人間の満足を増加又は減少せしむる原因は何であるかと云ふことを全く正當に且有益に考察することが出来、而して此研究が即ち經濟學である、と云ふのである。斯くして氏の富の概念は經濟學の主題となり、即ち眞に經濟的富たることを得たのである。⁶⁾

4) Cannan; Theories of Production and Distribution pp. 8-10

5) 本誌第十卷第一號 pp 71-6

6) Cannan; Wealth, pp. 16-18 7) Cannan; Wealth, p 17.

氏は斯く氏の富の限界が程度のあることを認むるところに於て氏の富を人間の幸福の比較的物質的方面 (The more material side of human happiness) と云ひ又は簡単に物的幸福 (material welfare) と呼んでゐる。⁷⁾

(三) 富の所得性、之が氏の富の概念の第三の特徴である。即ち氏の富は或期間に入り来るものであるが故に時の觀念より見て所得である。但し其所得の物體に就いては、普通の所得が金錢其他外界の物たることは、全然異なることを注意せねばならぬ。斯くの如く經濟學の主題を一定期間に入り来るものとしての所得とすることは、決して氏一人に限る特徴とは云へぬが、而もこは、漸く輒近に於ける學界の趨勢なのである。⁸⁾ 即ち斯學の主題は氏が述べし如く、Capital Wealth より Income Wealth に次第に變遷し來つたのである。¹⁰⁾

(四) 氏の富の第四の特徴は、主格に就いてある。而して其は第一、先に述べし如く富に主格としての人格の必要なることを特に主張し、それを明かに限定したこと。第二、其主格の内に階級を加へ、階級全體の富なるものを考察せんとせしこと。¹²⁾ 第三、此異なる主格の富、殊に個人の富と國民の富との關係に就いて、次の如き見解を下せしことである。(イ) 此三種の主格の富の内、基本的なるものは個人的富であつて、¹⁾ 而して氏の社會の富は、普通の原論に、社會的富とする、其社會の人員の數や個人の富を考慮することなく、單に其社會に存する全體の生産物にはあらずして、其社會に住んでゐる各員の物的幸福即個人的主觀的富を基礎として考察したものである。¹³⁾

氏の富の概念には、更に、上述の四特徴の相互の關係に就き特に注意すべき特徴がある。即ち

8) 福田博士、改定經濟學講義第一卷五五一五六頁 9) Cannan; Wealth. pp 4-6
Cannan; Theories of production and Distribution pp 14-3
10) Marshall; principles of Economics. 1ed. 2ed. に於ては斯學の主題は所得なることを明言してゐる 同く Marshall; Economics of Industry p. 1. に it (Economics) inquires how he gets his income and how he uses it と云へり

の富の概念に於ては、之等四特徴は、内面的必然の關係に立つものである。多くの富の概念論に見られるが如く、任意に寄せ集め得らるゝが如きものではない。氏の富の他の三特徴は、其第一の特徴たる富の主觀化の必然的に伴ふ結果であり、又は此根本的特徴成立の要件を成すものである。即ち先づその第二の特徴について見るに、金錢を得る爲め以外の動機よりする生産の大部分は交換價值を有する所謂富の中に入らざるも而も氏の富たる人の物的幸福は之に關はること大なるが故に富を主觀化することは自ら交換の可能性と云ふ表徴を富の概念より排除することとなる。次に、主觀的富は人の内界へ流れ入るものであつて、所謂所得に關はり、それ自身一の所得性を有するものなるが故に、自ら第三の特徴たる所得性を帶ることとなる、終りに、第四の特徴たる富の主格に就きても、主觀的の富はそが何人に依りてか享受されてゐるもので人を離れ得ないから、其富には自ら主格として的人格を伴ふことの色彩が強くなり、又主觀的富は此を享受する個人を離れては成立し得ないから個人的富が自ら總ての富の基礎となるのである。

斯の如く富の主觀化と云ふことは氏の富の根本的特徴であつて、他の特徴は自ら此中に包含せらるるものなのである。されば氏の『富』の意義を論ずるにも、主として此富の主觀化に就きて論ずれば足るのである。

其二 氏の富の概念の意義

一、經濟學の人生化

思ふに經濟學の人生化は實に經濟學發展の歴史であつた。

○14)

- 11) 本誌第十卷第一號 p. 67. 12) Cannan; Wealth. ch. X.
13) Cannan; Wealth pp. 224-7 C
Cannan; Theories of production and Distribution pp 11-13
14) Marshall; Principles of Economics pp. 754-69

先づ富は經濟學發展の初階段に於ては甚だ人生に縁遠きものであつた。マーシャル氏の云へるが如く「近代の經濟學は、其淵源に於ては富を人生の手段と云ふよりは寧ろそれ自身終局的のもの」と看做す傾向を有してゐたのである。¹⁵⁾然るに後に及んで富は人生の手段となり人生に近きものとなつた、而して現代經濟學一般の富の概念は此狀態にあるのである。然るにキャナン氏に至つては、更に再轉して、今日富とせられてゐるものは富の手段となり、富は人の幸福の狀態となり人生そのものとなつたのである。¹⁶⁾即ち氏は斯くて富の人生化を終局まで押進めたのである。

此富の人生化の徹底の斯學に及ばず意義は、當然に經濟學そのもの、人生化の徹底である。斯學の人生化は種々なる方面から種々なる點に於て行はれた、經濟人が次第に現實の人間となり、經濟行爲の動機が機械的のものより次第に人間的のものととして取扱はれるに至りしことも、斯學人生化の著しき一面である。マーシャル氏原論の人生化の主因の一は此點にある。¹⁷⁾然るにキャナン氏に於ては、富の概念を最徹底的に人生化することに依りて、此經濟學の人生化の趨勢を最徹底せしめたのである。即ち以下氏の著書に就き此點を具體的に明にしやう。

氏の原論“*Wealth*”は富の原因の研究である。而して氏の主觀的富は人が貨物及勤勞即ち經濟財を消費せし結果なれば、此富は人の消費生活を決定する條件、即ち、第一に個人が得る經濟財の量、第二に人がそを處分する方法、第三に之を享受する人の欲望の性質に關することは當然である。故に氏の原論は主として此富の三條件の研究である。而して經濟財を主題とする普通の原論の研究は殆ど、僅に此第一條件の、而も其一部に關するものである。従て氏の原論は普通の原

15) Marshall; Principles of Economics. p. 754.

16) 本誌第十卷第一號 pp. 68-9 pp 71-6

17) Marshall; Principles of Economics. Preface p. XIII. 參照

論の如く生産、交換、分配并に消費の三又は四部門に分たることなく、其考察は寧ろ此三條件の觀點よりなされるゝことが最適當である。余は以下此條件を富の三條件と呼ぶ。

其第一部(第二十五章)は、富の三條件を一般的に考察するのである。そは富成立の根本條件を論ずる點に於て所謂生産論に相當するものであるが而も普通の生産論は單に富の第一條件の一部に關するもので、こゝには更に直接消費生活に關する他の二條件が、考察されてゐる。

第二部(第六—十二章)は、富の第一條件即ち各人の得る經濟財の分量を決定する原因の研究論である。こは更に二段に分れ前段(第六—七章)は、現社會に於て經濟財の個人への供給を支配するものは何なりや、を論ずるものである、其の中心理論をなすものは人間の利己心の働と價格決定の理論とである、故に此は普通の原論に所謂價格論に相當すべきものなるが而も所謂價格の理論は本論の説明の基本的理論たるに過ぎずして、其範圍は遙に所謂價格論より廣く又遙かに多く實生活に觸れたるものである。其後段(第八—十二章)は、個人の貨幣所得の決定論である、是、前段の提論に依つて、個人への經濟財の供給を支配する主たるものは、現社會に於ては貨幣所得なることを知つたから、各人の此所得の量を明かにすれば本段の目的たる個人の得る經濟財の分量は知り得るわけであるからである。されば、こは所謂分配論に相當するものであるが、而も普通の分配論の如く所謂 functional distribution を主とするものではなくて、個人の所得源たる勞働又は財産の各人の所有量を決する諸原因、婦女子の所得に伴ふ特殊事情等、甚だ實人生に觸れた諸問題が考察されてゐる。

第三部（第十三章）は主として富の三條件の第二即ち各人が其得たる經濟財を處分する方法及第三即ち經濟財を享受する人の欲望の性質の研究である、されば、これは所謂消費論に相當すべきものであるが、而も普通の消費論の主とする效用遞減に關連せる事實の外に人の消費生活又は主觀的富を決定する多くの直接原因が考察されてゐる。

要するに氏の富の根本的特徴は、斯學の全體即ち生産、交換、分配、消費の總ての論を人間の消費生活の觀點より統括し、此生活の直接の條件又は原因に改造することゝなつたのである。而して本來の人生々法は、人の消費生活にある——文化的創造生活も亦此意味に於ては消費生活である——が故に斯學は斯くして直接に實人生の爲の經濟學となつたのである。是即ち斯學の人生化そのものである（註一）。

今經濟學の歴史を見るに、生産論は久しく偏重せられ、之に反して、消費論は輕視され、時には斯學の部門より除去せられた程であるが、輒近に於ける斯學人生化の發展は自ら消費の問題を重せしむるに至つた、而も尙消費論は原論の卷頭に於て序論の地位を占め又は末尾に於て附論の地位を占むるに過ぎなかつた、然るに氏に至つては、Capital Wealth 又は Income Wealth として生産論又は分配論の地位にありし富が、Satisfaction となりて消費論に移ると共に、消費論は一轉して原論全體の中心問題、終局の目的となり、所謂生産の學であり第三階級の營利の學たりし斯學は、全人類の眞人生の爲めの學となり、斯學の人生化は徹底せしめられたのである。

以上は主として氏の富の根本特徴に就いてあるが、此特徴の中に包含せらるべき他の三特徴の

18) Marshall; Principles of Economics, Book III

19) 山崎覺次郎博士、經濟原論第五篇、

意義は自ら此根本特徴の意義の中に包含せられ従て同じく斯學の人生化なることは前述せしところより明かである。只茲には(一)交換可能性の排除と云ふことは交換價值を有せざる財をも斯學の問題たらしめ(二)所得性の高張は所得論に重き地位を與へ(三)富の主格中に特に階級を加へしことは専ら階級全體としての所得を論ずる第十一章を結果した、ことを一言して置く。

二 經濟學の擴張

氏の富の第二の意義は、經濟學の擴張である。經濟學發展の歴史は斯學の人生化であると共に又斯學の擴張であつた。マーシャル氏も前掲の語に併せて『近代の經濟學は其淵源に於て其範圍が粗糲狹小であつた』と云うてゐる。曩に余は、氏の『富』が斯學を人生化せし結果は、如何に多くの新なる部分を斯學に附加し、如何に甚しく斯學を擴張したかを明にした。斯學の人生化は當然に斯學の擴張を齎すものである。斯かくて氏はまた斯學擴張の趨勢を徹底せしめたのである。

結論 氏の富の概念の現代社會問題に對する意義

今日の經濟學界は斯界の歴史の上に於て、社會問題時代とも云ふべきであらう。最後に余は氏の富の概念の、此目下の社會問題に對する意義を特に考察して此論を結ぶこととする。

氏の『富』が斯學を人生化したと云ふことは、斯學を人生の實際問題に一層役立つに至らしめたと云ふことであつて、『富』が斯學の學理上に及ぼせし結果を實人生に對する意義に於て考察し、ところのものである。故に此意義は『富』の學理上の意義に對しては實踐的意義と云ふべきもので

20) 第六章に於て家庭内に於ける、篤志家による及び國家の強制による經濟財の供給を考察し、pp. 96-7.
 21) 第十三章に於て彼自身又は家族の勤勞及財産より來る物的利益を考察す、p. 209.
 22) 第八章より第十二章
 Marshall; Principles of Economics. 7ed. p. 754.

ある、而も『富』の眞の意義は此にあるのである。余は總ての根本概念及學理に就きても全く同様に考ふるものである。

此富の斯學の人生化と云ふことを特に今日の社會に就きて云へば現代の社會問題に一層役立しむるに至つたと云ふことである。於茲吾人は氏の富の意義を一層我々に適切ならしめんが爲めに更にそれを現代の社會問題に對する關係に於て考へて見やう。

屢々述べしが如く氏の富の根本特徴は富の主觀化である。而して氏の富の特徴及其意義、氏の原論の特徴及其意義は總て此富の根本的特徴に發するのである。故に富の主觀化は氏の總べての學說の特徴及意義の淵源である。

前述せしが如く、從來及現在の經濟學界に於て、斯學の主題とせらるゝ富の概念は、殆ど總べて、交換價值を有する貨物及び勤勞である。然るに氏が此學界の殆ど動かす可らざる大勢に叛き、富の主觀化を主張するに至りし動機の其中心、根底には、思ふに、強き實踐的要求又は動機が働いてゐる。而して此強き實踐的要求は、現代の社會問題と云ふ重要な問題に充分役立つことの出来ない今日の經濟學を、充分之に役立ち得るものとせんとする、氏の願望であると、余は考ふるのである。此ことは氏の次の論旨に於て最明白に窺はれる。即ち氏は『生産及分配の學說』に於て曰く、今日迄の經濟學の主題とせられし富は、交換價值を有する貨物并に勤勞であつた。然し輓近の社會主義的又は共產主義的問題の目的とするところは、斯る富の増加ではなく、人類の物的幸福——氏の富——を増すことである、從て其中心問題とする所は此物的幸福であ

る。然るに此「物的幸福」と「交換價值を有する貨物又は勤勞」との二者は、以下の諸事情に依つて一致することの出来ないものである、(一)所謂富には效用遞減の法則の行はるゝこと、(二)物的幸福には所謂富を得る爲めの勞苦を考慮せざる可らざること、(三)金錢を得る爲め以外の動機よりする生産物の大部分は交換價值を有する所謂富の中に入らざるも而も人の物的幸福は之に關はること大なるものである、こと之である。依つて「經濟學を交換價值を有する貨物及勤勞に就いての考案に限る經濟學者は現代社會問題に關して沈黙を守るか又は經濟學者として之はなく單に Social philosopher として語る外はない」と云ふのである。²³⁾

斯くて氏の『富』の主觀化の根本的動機は社會問題的實踐的要求であり、從て又氏の學說の全體は社會問題的意義を有することゝなるのである。

即ち今之を氏の原論に就いて見るに、此社會問題的意義は先に示せし人生化の諸點に於ても窺はれるが、此外に次の諸點に於て特に顯著に現はれてゐる。(第一)氏は、其原論の第一部の富の根本條件論中第五章の社會制度論に於て、現社會の價值を冷靜に批評し、²⁴⁾(第二)第二部の前後供給行爲の支配論に於て、現社會に於ては貧富の懸隔あるが故に經濟財供給の支配は欲望に依らずして需要に依ることを力説し、²⁵⁾(第三)其第二部の後段所得論に於て、(一)所得不平等の世襲性及²⁶⁾(二)婦人の經濟上の不利の原因を力説し、²⁷⁾(第四)其第三部に個人の所得と富との不一致を來すべき七つの原因を論ずるに當つて、其各原因が、富の不平等を所得の不平等より大とするか小とするかと、云ふことに論及してゐる。²⁸⁾而して以上の諸論に於て貧者及婦人と云ふ經濟上の弱者に對する氏の同情が

23) Cannan; Theories of production and Distribution.

24) Ibid; pp 72-5

25) Ibid; pp 113-4

26) Ibid; pp 198-202 270-8

27) Ibid; pp 202-7

28) Ibid; pp 210-221.

明かに其根底に流れてゐる、然し其論述は決して屢々見る如く感情的誇張的に真理の闡明を攪亂する如きものではなく、飽く迄も公平なる真理探究者の態度を失はざるものである、現社會の價值を論ずるに當つても亦同様である。

次に又氏は“Economic Outlook”に於て經濟的理想を論じ、それは資本の意味に於ける富の増大又は一人當の可能的最大所得ではなく、可能的最大なる物的幸福であるべきであるとしてゐる。要するに、此は氏の主觀的富の概念を徹底して其社會政策の理想を明かにしたもので、同じく、社會問題の意義を現はせるものである。

斯くの如くにして氏の富の概念論の根本的意義は社會問題の意義である云ふことが出来るのである。

今や社會問題論は未嘗有の白熱狀態を呈し頗る多數の論説が日に月に現はれてゐる。然し其多くのものは、其論の基礎たるべき理想論と現社會論とに於て不充分であるが爲めに、此二者を結ぶべき政策論は、其學問的價值に於て、甚だしく傷けられてゐる。而して後の缺點の救済は、充分なる經濟原論の助け俟たねばならぬ。氏は、此際に於て、經濟學を一層社會問題に役立たしめんが爲めに「富の主觀化又は人生化」と云ふ問題を呈出したものである云ふことが出来る。故に氏の此獨創的なる努力は、目下の急務たる社會問題論の意義より見るも、亦吾人の大いに考慮し尊重すべきものである。(完)

(註一) 富の主觀化と經濟學の關係は重要な問題なるが故に改めて詳論する。今は富の意義を明にする爲のみに止めて置く